

ルイ・ブランがビューシェの思想の影響を受けたというのはありそうなことである。しかしルイ・ブランはいくつかの決定的な点でビューシェとちがっている。そのなかで最も重要な点は、ルイ・ブランが、「プロレタリアートがみずらかを解放するために欠けているのは道具であり、道具を彼らに与えることは政府の仕事である」という理由で、後年ラッサールがその労働者生産協同組合のためになしたように、自ら創設しようとしていた「社会的工場」に国家の援助を求めたことではない。それはただ根本的な錯誤であったし、さらにルイ・ブランにおいてはまさに論理的矛盾でもあった。それというのは、一定の国家秩序を代表する政府をして、その制度を廃止することを予定した（これがブランの明白に表明した意図であった）制度を生みださせることは、おそらく不可能だからである。そして一八四八年に臨時政府の反社会主義的多数派がブランの計画をまず漫画扱いにし、ついでぶちこわしたのは、首尾一貫したことであった。しかし彼が計画した社会改革の本質にたいする問題にとっては、この要求（国家援助の）は、重要なことではない。それよりもはるかに重要なのは、ブランの社会的プログラム自体が中央集権的な考えのものであったという点である。彼は、各大産業が中心の工場のまわりに集めることによって単一の組合に結成されることを望んだ。彼は、この基本的にはサン・シモン流の思想に連合主義的な色彩をそえたが、それは、一工場における全労働者の連帯が一産業部門内部の各工場の連帯につながり、ついには全産業部門の連帯となって完成することを求

めるためであった。しかし彼が連帯化とよんだのは、実は、独占的地位をもつところの集中化された全経営への合併であった。たしかにルイ・ブランが目ざしたのは、無制限な競争、彼があるとき国民議会でいったように、「この卑怯で残忍な原理」の根源と闘うこと、すなわち個人的競争にかわって集团的競争が現われるのを阻止することであった。そしてこの集团的競争こそは実際に、内部的分化とならんで、生産協同組合を脅かす主な危険なのである。——この危険の一般的出現を示す一つのよい実例として、まさにその頃イギリスのキリスト教社会主義の協同組合運動の指導者の手紙がある。それは、この運動によって設立された生産協同組合について、それら組合が「全く欲得ずくの競争心に動かされ」、また「現在の制度のもとでも可能な以上にただ有利な競争を目標とした」ことを語っている。このような危険は、ビューシェおよびその派の人びとも認められていた。しかし彼らは独占をもってこの危険に対抗することを拒否した。独占は、彼らにとってあらゆる生きた発展の麻痺や終滅を意味したため、いっそう大きな危険であると思われた。彼らの提案では、協同組合間の競争はむしろ協同組合自体の連合によって整理され規制されるべきであった。ここでは自由な連合と計画的合併とが対立している。もっとも、ルイ・ブランにおいても、連合主義的思想がくりかえし現われて中央集権主義的外皮を突き破っており、その国家計画の失敗後にはとくにそれが明らかであることは認めなければならぬ。彼はビューシェの予備金計画を仕上げ、それをもって「各種の社会的工場の間

の相互扶助および連帯の原理を実現」すべきものとした。しかし彼は、まず国家発意の計画から自由な協同組合の計画に移るやいなや、この目標に達するには、既存の協同組合の連合化をはかる方途以外にいかなる方途もないことを知っている。すなわち既存の協同組合がたがい理解し、「あらゆる予約のうちで最も重要な予約たるプロレタリアート廃絶の予約」を全国にわたって組織する中央委員会を任命することである。このような言葉はたしかに崇高なものと滑稽なものとは相接している。しかしプロレタリアートにたいする、協力によるその自主的廃絶の呼びかけはその後の時代にとっても重要な、実践的にも重大な事柄をふくんでいる。そして一八四九年の末には、ブランが、一〇〇余の協同組合の連合から成り、彼の論敵ブルードンの「労働相互組織」の思想を実現した「友愛組合同盟」に賛成しているのが見られる。それについて彼はたしかに、この同盟の任務のなかに、「一般的利害に関する仕事の集中化」が述べられて、彼はたしかに、この同盟の任務のなかに、

「一般的利害に関する仕事の集中化」が述べられて、彼はたしかに、この同盟の任務のなかに、総じてわれわれはただブランのうちに、「ユートピア」社会主義の生きた伝統に属する多くの思想を見出すのである。彼は将来生産協同組合は完全協同組合に移行するものと見ていたが、それはキングが消費協同組合にそれを見たのと軌を一にする。この点からすれば彼はすでに——大規模の「農工コロニー」を連合体として建設しようとした、彼も賞讃する友愛組合同盟とまさしく同じように——協同組合的移住地の建設を考えており、そのさい大経営の経済技術的必然性から出発している。すなわち「人びとは、

農業を組合および共同所有に結びつけることによって、その大経営方式をうち立てなければならない。」また彼は、できるだけ工業を地方に移し、「工業労働と農業労働とを結合しようとする。」——ここにもまた時間的分業や現代の村落共同体における農業、工業および手工業の結合というクロポトキンの思想の先駆が見られるのである。

ほどなくしてはじまった、反動による協同組合連合の弾圧にもかかわらず、フランスではその後の年月にも多数の新しい生産協同組合が発生した。医師や薬剤師までが協同組合を結成した。（この場合、共同の作業は問題になりえないのであるから、本当の生産協同組合でないことはいうまでもない。）協同組合熱の勢力は革命後にも継続した。クーデター後の多数の協同組合にたいする迫害や解散も、その運動の息の根をとめることはできなかった。それを脅かす真の危険は、ここでもイギリスと同じく、内部から起った。すなわち資本主義化、資本主義的または半資本主義的組合への漸次的変質がそれであった。一八五〇年頃にはじまったイギリスの「キリスト教社会主義者たち」の、「すべての財貨の生産を漸次に協同組合形態に移し、相互競争の下にすべての協同組合間の協定をとおして価格を決定させるため、」生産協同組合の大きな網をつくるという熱心な努力が行われてから四〇年後に、ベアトリス・ウェップは「労働者の友愛」という理想を多かれ少なかれ忠実に守った八つの協同組合、しかもその多くは何かの点であやしいのであるが、とにかくその八つの組合を別によれば、残りのすべては「驚くほどに様々

な貴族制的、寡頭制および君主制的構成を示している」と述べた。またフランスではルイ・ブランから五〇年後に、この点で全く典型的な眼鏡製造業者の生産協同組合が存在したが、それは少数の組合員と大抵同数の支持者のほかに、その一〇倍もの賃銀労働者を雇っていた。しかしわれわれはまたいたるところで、社会主義のための内部的闘争のりっぱな実例をも知っている。それらには悲劇的な特徴を示しているが、しかし同時に何か先駆的なものを含んでいる。生産協同組合は、「人類救済のために本質的なことがらを、協同組合運動に期待する」すべての人々の「不運児また寵児」であると正當にもよばれた。しかし消費組合のある第一線の闘士が、商品市場のために働らく生産協同組合を「核心および本質において全く非社会主義的」であるとよんでいることは事実からも理解できる。それというのは、「自己の立場だけに立つ生産者は、つねにまたどのような事情の下においても分離主義的、個人主義的または党派的な利害心を抱いているからである。」だがこのようにいい方に存する誇張は別としても、生産協同組合はまさに「自己の立場だけに立つ」べきではない。それに対して二つの大原則、すなわち完全協同組合における生産および消費の結合と連合主義とをともに守らなければならない。

消費協同組合の発展は、数的上昇の直線をたどっている。文明社会のかなり大きな部分（特質的なことにはアメリカ以外での）が、いまや消費の面では協同組合に組織されている。これ

にたいして生産協同組合（ここでのいうのは厳密な意味での生産協同組合に限り、たんに個別的な生産を兼ねたものにし、あるいはより集約的に営むことを目ざす多くの部分的な、主として農業における組合のことではない）の発展はジグザグな線で表わされ、全体としてはほとんど上昇の傾向を示していない。新しい組合がたえず発生しているが、そのうちの活動的な組合の多くがたえず資本主義の領域に移り行き、ほとんどいかなる連続性も存在していない。しかし完全協同組合についてはこれと異なるものがある。この発展について語られる場合にも、それは多数の小範囲のものについてのことであって、これらの間には一般に真の結合は成立していないように見える。消費協同組合や生産協同組合の建設は、地域から地域へとひろがる包括的な運動から出発した。完全協同組合的な意味での移住地（コロニー）の建設はその多くが何か突発的なもの、即興的なもの、効果をもたないものをふくんでいた。前者とは反対にこれに欠けていたのは、フランツ・オッペンハイマーのいわゆる「遠隔作用力」であった。とはいえ、そのうちの多くのものが評判にならなかったというのではない。しかしその魅力は個別的であって新しい共同社会細胞を生み出すにいたらなかった。協同組合的移住地の歴史においては、ヨーロッパ（真の自発性と自主性との本質的基礎を欠くソヴェトロシアを除いて）でもアメリカでも、連合主義の傾向を指摘することはできない。消費組合はたえず、またいよいよ広く連合を結成した。一般に農業生産協同組合や工業生産協同組合も、断続的でまた増減しながらも連合を結成した。

しかし協同組合的な移住地は概して連合しなかった。その運命はその意志に相反している。それらははじめ孤立を欲しなかったのに孤立した。影響力の多い模範たることを欲したのに、たんに興味ある実験となった。ダイナマイトを装填した社会改革の開始たろうと欲したのに、一つ一つが自己目的となった。一方の消費協同組合および生産協同組合と他方の完全協同組合との間のこのようなちがいの原因は、結局、出発点における本質的なちがいに存するように思われる。消費協同組合と生産協同組合とは、場所や経営のすべてにおいてほぼ同じような一定の状態から発生した。したがって当初から、その状態を克服するために企てられた実験がたがいに影響し合う芽生えが存在し、したがってまた連合への芽生えも存在した。なおこれに関連するのは、これら協同組合の建設を鼓舞した計画は、一つの一般的な思想から生れ出たのではなく、いわば状況自体が計画者にかけて質問から生れたのである。このことはキングにおいてもまたビューシエにおいても十分にあとづけることができる。それになお二人とも最初から連合主義者だったのである。しかもビューシエは、彼の提唱による労働組合についてもすでに連合的団結に注目していた。どちらの場合も計画は、一定の緊急事態を救済することに向けられており、これら緊急事態の問題が起った場所ですべてを解決しようとした限りでは、地域的人格をもつものであった。このような計画は、その本質からして一定の地域に、まさに問題が発生した地域に関係する限り、十分な意味において局地的、すなわち地域的とよぶことができる。

異なる地域に同様の問題が存することからしてすぐに連合的団結の可能性が生じ、さらに今日の多くの消費組合連盟のような巨大な組織をも生むことになる。

移住による完全協同組合建設の歴史においては、一般に事情はこれと根本的に異なっている。ここではわれわれは多かれ少なかれ現実の状況から独立し、しかも一定の地域とその要求にたいする真の結びつきを欠き、言葉だけで指図し、あたかも空中で計画をたてたあとでそれを地上に引きおろすような思想をくりかえし目にするのである。こうした計画たるや、フリーエにおけるように、全く思弁的に発生し、したがって全く図式的な形態をとるにしても、オウエンにおけるように、一定の経験からつくりあげられ、経験的な前提を考慮にいれていようと、一定の状況の問題に答えるものではなく、地域や地域の問題に結びつくことなしに新しい状況を形成することを目指すものである。このことは外国への移住の場合、もっとも明白である。その移住はおそらく社会主義的な規制や秩序のもとに行われるようなことはなく、むしろ移住の動機に新たな動機すなわち社会的企画の実現に参加しようという意志がつきまとい、そしてこうした意志はしばしば唯一の正しい正当かつ真実なものと感じまた信じられる組織にたいするドグマのなかにおしこめられ、その拘束的な要求はときにはメンバーの間の内的関係の自由な活動に対立することになる。(心情の共同はおそらくつねに生活の共同を建設するには不十分である。それにはもっと深い、人間存在に基づく結合が必要である。) ドグマを忠実

に奉ずる移住地は硬直化に脅かされ、硬直化にたいする反抗がはげしくなった移住地は分裂に脅かされ、そのいずれにおいても条件や制限にたいする矯正的な洞察力を欠いている。

ドグマが支配するところではただ移住地の孤立しか生れない。「唯一の正しい」形態からくる排他性が他との連繫を妨げ、しかも同様な考えの建設との連繫さえも妨げ、それぞれのなかで信奉者たちは、この形態に、唯一かつ無条件なものとしてのこの一回的な実現に全くとりつかれている。しかしドグマが退いたところでもまた、経済的精神的に閉じこもった移住地は、もとに外国では孤立、無連絡および無影響の運命をたどっている。もしも強力な生命および運命の大波に支えられた教育の力が、共同体感情と共同体意志につきまとう利己心にたいする永続的な勝利を保証し、あるいはむしろそれによって利己心をより高い形態にまで高めることができるならば、こうしたことはすべて決定的ではなかったであろう。しかし普通にはただ集團的利己心、善意の利己心がある程度個人的利己心にかわって現われている。そして個人的利己心がときに協同組合の内部的団結を脅やかすように、しばしばドグマと混和した集團的利己心は協同組合相互の間や協同組合と一般社会との間に真の共同社会的關係がうち建てられるのを妨げている。

われわれに知られた移住地建設の企ては、大部分失敗に終るか、あるいは忘れさられるかした。また多くの人びとが考えるのとはちがひ、決して共產主義的なものだけではなかった。こ

のさいもちろんわれわれは、宗教的諸教派の個々の、その生命がただ集團の信仰の力の圈内において、またこの信仰の力の部分的現象としてのみ理解されるような企ては除外しなければならぬ。特質的なことは、このような企て、このような企てにおいてのみ、たとえばカナダにおけるロシアの下ホボール教徒や「フッター教徒」⁽¹³⁾におけるように、連合的形態が現われたことである。したがってクロボトキンが、共產主義的移住地の試みの失敗を、それが「コミュニティ」のうちにたんに経済的秩序における消費と生産との一様式を見るかわりに、宗教的性質の刺戟に基礎をおいた」ことに帰しているのはなほだ不当である。移住地は、まさしくそれが宗教の代用物の燃焼ではなく真の宗教的精神の高揚の表現として発生し、その存在を神の国の開始と見たところこそ一般にその持続力を実証したのである。

クロボトキンが、多くの移住地の試みの失敗の原因としてあげているものうちとくに注目しに値する二つがあるが、それらは根本においては一つである。これは社会からの孤立と相互間の孤立とである。彼はそのような原因をコミュニティの小さなことに認めたが、それは誤りである。それというのは、彼が考えるように、小さなコミュニティではそのメンバーたちは数年間ごく親密な共同生活をおくった後で、たがいに嫌うようになることもあろうし、また割に長く存続した移住地のなかには大規模なものとともに小規模なものも見られるからである。しかし彼が集團の小規模を補うものとして連合の形成を求めたのは正しい。連合の形成が一移住地から

他の移住地への成員の移動を可能にすることは、クロポトキンにとって決定的な事柄であるが、それは実は連合がもたらす多くの好ましい結果のうちのただ一つにすぎない。根本的に重要なのは連合自体であって、集団の相互補足、相互助力、集団の間を流れながら勢を加えて行く共同生活の流れである。だがそれに劣らず重要なのは移住地が、別種の関係であるにせよ、一般社会となんらかの関係をもつことである。——それはたんに余剰の生産のために市場を必要とするからではなく、またクロポトキンも指摘しているが青年が隔離に堪えられないからではなく、むしろ移住地がかの特別の救世的信仰を抱かない限り、本当に生きうるためには、周囲の世界に影響をおよぼされなければならないからである、使命をになう者は、必ずしも言葉をもつてではないにせよ、必ずや存在をもってそれを表現することができなければならない。

クロポトキンはあるとき移住地の仲間からきた質問に、移住しようと考えているすべてのグループにあてた公開状で答えたが、彼はそのなかで、この名に値する共同生活は、相互に独立しながらその力を結び合せる家族間におけるような結合の原理を基礎としなければならないと強調した。それで彼がいおうとしたのは、個々の集団にしてもすでに連合により、すなわち共同社会の最小単位の間で結合から成立しなければならぬということである。連合への運動が集団をこえて拡大するためには、その場所が必要である。「実験は」と、クロポトキンはその『近代科学とアナキズム』でいっている、「一地域において行われるべきである。」彼はつけ加

えて、この地域は町と田舎とを含まなければならないといっている。再び経済的動機が大きな社会的動機のなかに組みこまれる。真の共同生活はもろもろの機能の縮小や分離ではなく、その充実と相互の働き合いを意味する。しかしそれにはクロポトキンが規定したと見られるように「町がみずからをコミュニティにかえる」のでは足りない。もしも町が組成されずに社会的に無定形のままでよく組成された村落連合に相対するならば、町は結局消極的にしか活動せざるをえないであろう。町は、村落と真に実のりある交渉にはいるためには、みずからを編成し、協同組合の一連合体に建てなおさなければならない。現代の計画経済思想のうちにはすでに——大部分は技術上の組織化的考慮から起っているが——この方向への注目すべき刺激を見出すことができる。これまでの多くの移住地建設の試みがたどった問題の多い経過を示すため、その長い教訓に富む歴史のなから、ここではただ一つの特質的な一例をあげることにしよう。それはこの種のものでは最初であるオウエンのかつ彼自身の仕事では唯一の事業であったインディアナ州でのニュー・ハーモニーのことである。彼はその土地をドイツから移住した「分離教徒」から購入した。彼らは二十年の労働ですでにその地にいくらかの成果をもたらしていた。成員の受け入れは無選択に行われていた。ドイツの偉大な経済学者フリードリッヒ・リストは当時そのアメリカ日記に、「構成分子は最良ではないようだ」と誌している。最初この新しい共同体の構成は成員の完全な平等の上に行われ、かくてこれは「平等の共同体」とよばれた。二

年後数個の別々の集団にわかれてから、共同体を小さな組合の連合体に改造しようという企てがなされた。しかしこれも、また同様の改造計画も失敗におわった。三年間の存続の後、イギリスへの旅から帰って再び移住地を見たときオウエンは、「この仕事のためにあらかじめ教育されていない多数の外来者を、一つの家族共同体の如き共同生活をいとなむように、結合しようとする企ては尙早であった」こと、また「個人的制度の慣習」があまり強固であることがわかったことを自認せざるをえなかった。彼は一部の土地を分割売却し、また他の一部を分割小作させることによって（この実験は彼の資産の五分の一を失わせた）、この協同組合を私的資本主義を基礎とする移住地の複合体にかえ、そしてただ「彼らの感情と明白な利害が左右するところにしたがって、すべての者に有利な条件のもとで、一般の労働を結合するか、あるいは労働と労働とを交換するか、それともその双方を行うか、ないしはどれをも行わないか、どのようにしてもするがよい」とすすめているだけである。

これが、ドグマ——オウエンはその確固たる計画にもかかわらず、これに縛られてはいなかった——のためではなく、おそらくはメンバーの間の深い有機的関連を欠いたために失敗した移住地の一実例である。

それと逆の実例としては、カベールのイカリアの発展をあげることができよう。これは、しろうと臭いが大当りした、あるユートピア物語を実現しようという試みとして企てられ、非常な

失望幻滅や困苦欠乏の後で、またオウエンの試みのようにある教派、こんどはモルモン教の土地を受継いで成立し、その開始から最後の分派の終末にいたるまでの半世紀の間に、分裂に分裂を重ねた。分裂は、まず最初熱情的で高潔な精神を抱いてはいたが凡庸な人物であったカベールが、計画発案者の独裁という形で独断的計画の独裁を要求したことから起り、これをめぐっての口論やいがみ合いが重なって内争にまで燃えあがった。分裂から生れた二つのグループのうち、一つはカベールの死後しだいに崩壊したが、他のグループでは新らたな分裂、「年とったもの」と「青年」との分裂が起り、そのさい青年たちは、独断的計画を擁護し、たとえば、住居のまわりにある、花だけでなく果樹をも栽培することのできた小さな庭園に反対した。ここに嘆かわしい「個人主義の残り」があるというのであった。問題は——法廷で解決された後で——移住地の分裂に終ったが、年寄りたちがその手で建てた建物をふくむ部分が青年たちの所になった。年寄りたちの方のセトルメントはその後二十年間存続してから「老衰」で死滅した。経済的にはなお存続するに十分な力があつたが、信仰の力が消えさつたのであった。「わたしたちは全く少数になり、また外部の人たちと同じようになつたので」とある婦人のメンバーは書いている、「もう骨を折って共同体で生活する甲斐がなくなった。」青年たちの移住地はもっと生命が短かった。あらゆる困難を経て彼らはカリフォルニアに移った。しかしこの新しい移住地の組織では奇異なことに私有の原則が重要な地位を占め、かくしてそれは株式会

社にくらべても不当ではなくなった。間もなくしてそれは解体したが、それには地価の騰貴が決定的であつたらしい。このように、イカリアの歴史は独断主義と日和見主義との奇妙な連続をたどっている。「われわれは成功しようという狂気のような意志をいだいていたのに」と消滅してから数年後一人のメンバーは書いている、「われわれが身にとっていた上衣はわれわれにとってあまりに重く、またあまりに長すぎたため、しばしば泥のなかをひきずり歩いた。私がいいたいのには十分に抑制されていない天性、すなわち『野獣』が姿を現わしたことである。」しかし姿を現わしたのは「野獣」などでは全然なく、別して人間特有の利己心であつた。

最後にわれわれは、社会の構造的更新の視点から、協同組合の三つの主な種類を見ることにしよう。

これら三種のうち、歴史的に見て格段に有勢な種類、すなわち消費協同組合は、本来再建の細胞たるには最も適していない。消費協同組合は、ただ人間存在の些細な、またきわめて物質的な領域において、人びとを互いに結合する。この領域は決して、おそらく一見してそう思われるように、消費のことではない。共同の消費自体は、人びとを結合する大きな力をもっている。そして共同生活の美しい光景および象徴としては、共同の食事にまさるのはいかつかつておそく存在しない。しかし消費協同組合がなすことは、消費自体ではなくて、むしろ消費のための購入である。共同購入は、本質上、それに参加する人びとに、協同組合運動の「英雄」時代に

おけるように、共同の仕事のための共同の世話や共同の責任が問題になる非常の時とか、あるいはまたその後の、そうしたことがなければ人に知られることもなく私生活のうちに埋もれていたであろうような人たちが、犠牲心をもって公の場面に立ち現われ、多くの人びとの苦しみのために闘った危機の時期とかでない限り、なんら重大な要求を加えるものではない。共同購入は営業となり、その責任が従業員に移るやいなや、人びとを本質的に結びつけることを止める。人びとの結合がすっかりゆるんで非人格的なものとなるため、共同体細胞やそれら細胞の複合的有機的構造への結合など問題とはなりえないし、よし協同組合店舗に結びついてあれこれ一部の生産が行われる場合にしても、同様である。私はこのような見解が、アイルランドの詩人ジョージ・ウィリアム・ラッセルの著書『国民の存在』（これはA・Eという匿名で書かれた）に特に明瞭に表明されているのを知っている。これは真の祖国愛をもってアイルランドの社会改造を論じた書物でこう述べている。「農民たちをただ一つの目的のための領域で——信用組合、酪農協同組合、ベーコン製造または協同組合店舗に（あるいはこれらすべてに同時に）と、つけ加えなければならぬ）組織するだけでは足りない。こうしたものはすべて手はじめにはなるかも知れないし、またそうならなければならない。だがもしそれらがその組織のうちに村のすべての仕事を発展させ、吸収しないならば、いかなる真の有機的社会も形成されないであろう。人びとは、いっしょに物を買うために消費者として団結するときは、ただこの一点で

のみたがい接触するにすぎない。利害の一般的合致は存在しない。……特殊化された組合はただ経済的能力を発達させるにすぎない。現代の水準をこえる人類の進化は、真の有機的社会を形成し結合する力に無条件にかかっている。」これこそはまさに、私が社会の有機的な構造的更新のもとに理解するところのものである。

生産協同組合は、消費協同組合よりもはるかに高度にこの構造的更新に参加し、すなわち新しい構造の細胞として役立つのに適している。財貨の共同生産は、個人的消費のための財貨の共同購入よりも要求するところが深いし、いっそう多くの生活上の精力と時間とを含んでいる。生産者としての人間は消費者としての人間よりも、当然はるかに積極的に仲間といっしょに働く。彼は仲間とともに生きた社会的統一体を構成する能力においてもまさっている。このことは、他人を働かせる人にたいしても、彼が団結によって、個人としてそうでありまたありうるよりも、いっそう力強く自己の活動力を発揮し成就するならばまたその限りにおいては、あてはまる。しかしこのことはみずから働く者にたいしてとくにあてはまる。それというのは一般に彼は団結によってはじめて強力になるからである。ただ問題は、彼がこのチャンス強く意識し、その実践的な見通しを信ずることができかどうかである。だが彼は、われわれがすでに見たように、途中できわめて容易に、ほとんど宿命的に、他人を自己のために働かせようとする傾向におちいる。消費協同組合は、外部的、技術・組織的に資本主義的形態に屈する

とすれば、生産協同組合は内部的、すなわち構造的および心理的にそうなのである。そのさい、生産協同組合はたしかに真の、たんに技術的ではない連合結成により多く達することができであろう。しかし小さな有機的単位とその有機的、連合的發展とが構造的更新にたいしてもつ決定的な意義が、生産協同組合による社会の改造に最も熱心な方面においても、いかに少ししか認められていないかをわれわれは二十年前イギリスのギルド社会主義において見た。ここでは一方、国家を二重の組織すなわち編成された多種の生産者代表と、全体そのものに対応する単一の消費者代表とに改造しようという大胆な突撃が計画され、他方ではしかし間もなくして「全国的」すなわち全産業部門を包括するギルド、「いづれかの産業に働らくすべての人びとの単一な組合への編成」に味方する傾向、依然としてまったくサン・シモンの考えの傾向が他の、「地域的」ギルドすなわち小さな有機的単位とその連合を目ざす傾向よりも、はるかに有力なことが証明された。有機的な構造的更新の原理が決定的となるためには、生産と消費とが結合され、生産では工業が農業によって補足される完全協同組合の影響が必要である。完全協同組合がそのまま新しい社会の細胞となるまでには、どれほど長くかかるにしても、それがただちに、相互に結合した磁気的な活動中心の広範な複合体として建設されることが、根本的に重要である。真の、必ずや永続的な内部からの社会の新秩序は、ただ生産者と消費者とのいずれもが独立かつ固有の協力単位として構成する結合——その社会主義的な力と活気とが、綜

合的な機能において放射的に、仲介的結合的な作用をおよぼすところの多数の完全協同組合によって保証される結合をとおしてのみ達成されることができであろう。

だがそれには、これまで百年以上にわたる歲月の間に現われた孤立的な、またその本質全体からして孤立を運命づけられた実験のかわりに、地域的に計画されながら連合体を建設し、ドグマ的固定がなく、多様な社会的形成を互いに認め、しかも常に全体を、新しい有機的な全体を指向するところの包括的な移住地の関連体が出現することが必要である。